

事例にみる子どもの自我自覚体験の様相 — 保育及び幼児の教育における子ども理解のために —

小 菌 江 幸 子

(2016年10月1日受理)

要 旨

自我自覚体験は、前青年期を最盛期としてその前後に生起する 경우가多いが、幼児期の自我の目覚め後、早ければ母子分離後の時期から生起する可能性がある。自我自覚体験に伴う感情はポジティブなものから不安感の強いものまであり得るが、不安感に捉われすぎないように保育者や教員、養育者からの心理的援助や理解が為される必要があり、それが有効に働くならば、安定的な自己理解や他者理解の力に繋がっていくと考えられる。

キーワード 幼児期の自我（自覚）体験、子ども理解、Attachment、独立分離、他者の内面の認知

1. 問題と目的

保育学生が自我について意識的に学ぶ機会は限られていて、多くは生涯発達心理学入門としてE.H.エリクソンのライフサイクルにおいて青年期のアイデンティティ確立の条件としての自我の永続性及び自我の斉一性について振り返ってみる時ではないだろうか。しかし自我の永続性はともかくとして自我の斉一性については各学生の過去の記憶から容易に取り出せるわけではない。そこでこのテーマでの演習をするときには、筆者はかなり注意深く講義したうえで自我の斉一性理解のきっかけとなる自我自覚体験についてのエピソード記述を学生に求めるのだが、筆者の近年の経験では、2割を超す学生が「考えたこともない、当たり前すぎて意識したことはない」と返答してくる。先行する調査においても、渡辺恒夫は1992年の大学生の自我体験の調査で2割前後¹⁾、天谷祐子は自我体験直後とみられる1997年の中学生への調査でも6割の生徒しか自我体験ありと判定できない²⁾という結果を報告している。

自我とは、事実上の「人格の行政官」「心の運転手」などに例えられる、知覚、思考、行動をつかさどる人格上の機能である。自我の斉一性とは、「自分はこの世界で唯一の存在である」ことであり、自我自覚体験とは、自分の自我の存在や働きを認知することである。

筆者は保育者養成に携わるようになって、保育学生たちの自我体験を記憶から呼び覚まし彼らに意識化させたいと意図し続けてきた。その理由は自我体験の不安について「大人に話しても通じるわけがない、分かってもらえるわけがない」と思い続けた筆者自身の幼い時代の諦めの体験が多分に影響しており、できることなら自我体験の想起を保育学生の幼児理解に役立てたい、と考えるからである。

自我体験についての先行研究を俯瞰すると、渡辺恒夫は自己、自己意識、自我、についての研究においては①ウィリアム・ジェームズの自己意識論に発する自己 (self) の研究、②フロイトの自我論に発する精神分析的な自我研究、③古典的ドイツ青年心理学における「自我の発見」「自我体験」の3つの流れがある³⁾と説明している。また、日本に自我体験研究を導入することになった西村州衛男は「自我体験は基本的には自分が自分であるという、内なる自己との出会いの体験」であり、「一種の啓示体験」でもあって、「外界との隔絶を生じ、孤立感を伴うことがある」⁴⁾と自我体験の主要な特徴について定義し、前思春期から思春期にかけての事例を取り上げている。臨床心理学の田畑光子は登校拒否の女子高生の事例をとりあげ「あまりに早い時期の自我体験は、思春期に至り心理的危機をもたらす」⁵⁾と報告している。そして高石恭子は34項目からなる「自我体験尺度」を作成し調査した結果、前青年期から青年期と考えられていた自我変容が10歳をピークに生起している⁶⁾と報告している。さらに天谷裕子は25項目の質問紙調査と半構造化面接での大学生から小学生への横断的研究、並びに縦断的研究の結果、小学生高学年と中学生ではほぼ半数に自我体験が生起しており、特殊な体験ではなくありふれて見られるものと言ってよいと纏めている。しかし、自我体験をした場合でも、そのことに意味を見出して記憶にとどめる人と、忘却する人の2タイプがあること、また自我体験へのこだわり方によっては抑うつ傾向に傾く危険が高く、自尊感情の低さ、無力感の高さに結びつく傾向についても言及している。天谷は結論として、自我体験は感情を伴うことが多いが、基本的には認知的な体験であり、個人差のある知的活動の一つだと考えられる⁷⁾と考察している。

本稿で取り上げる自我自覚体験についての検討は、幼児期から学童期にかけての事例の横断的検討と縦断的検討である。先行研究の概容からわかるように、自我体験はドイツ青年心理学の時代から青年期に特徴的な心理現象であると位置づけられてきており、近年E.H.エリクソンが青年期のアイデンティティ確立のための前提条件として位置づけた。その後の研究ではドルフ・コーンスタムがヨーロッパでの多数の事例を集めて紹介⁸⁾をしており、前青年期のみならず、児童期・小学生時代の自我体験も少なくない割合で起こることがわかった。しかし幼児期の自我体験の出現は捉えられておらず、幼児期の体験では記憶されることも取り出すことも困難なためではないかと結論づけられている。本稿においては幼児期から学童期の自我体験を例にとってその特徴についてマラーの発達理論と照らし合わせて検討していく。縦断的検討の事例は筆者の個人としての経験を自伝的記憶から取り上げていることをお許しいただきたい。また横断的検討の対象となる事例については、不確定未来において研究の対象として俎上にのることを、情報源が明らかにならない様態での研究発表であるならば可であると許可を得ている過去の首都圏の学生たち及び相談者から得たものである。

2. 研究方法

1) 質問紙による調査と半構造化面接による個別の聞き取り (横断的検討)

筆者は、平成4年から練馬区、板橋区の保健所にて3歳児健診の心理相談員を務め、平成16年からは首都圏で短期大学、平成21年度からは幼児教育専門学校の講師と心理相談員を務めてきた。その間の相談事例から自我の問題を取り上げたケース、また2008年から担当した短期大学および二つの専門学校での発達心理学の授業のなかで扱った、E.H.エリクソンのアイデンティティの確立条件としての自我の斉一性成立についての学生のレポートおよびその後の半構造化面接で得たエピソードを基に記述、考察をすすめる。

2) 内観法 筆者の自伝的記憶を基にした記述 (縦断的検討)

児童学を学ぶ大学3年生であった筆者が専門科目講義「保育学演習」を受講中に担当教官^(注1)から出されたその日のレポート課題が「人生の最も早い時期の自分の記憶についてのエピソード記述、つまり原体験、もしくは原風景について述べよ」というものだった。正直に言えば筆者の最も早期の記憶は、山奥の粗末な生家の回りは山吹やつつじや野いばらなどの花にあふれ、母が意図的に育てているチューリップやオダマキ草以外の植物は幼い筆者が自由に使ってよいものだったことを当たり前のこととして育った、と書こうとして、止めたのだった。そんなことよりもこれまで誰にもわかってもらえないはずのないこととして封印してきたエピソードについて、「書くなら今しかない」と思い立ち、レポートしたが、今回事例として取り上げる筆者の第1回目の自我自覚体験である。しばらくたって返却いただいた教官からのコメントは「大切な記憶として人生の最後まで忘れずにとっておくように」という内容であった。そのような経過を経て、本稿では20歳の筆者が記憶していた3歳半の春の自我自覚体験とそれ以後の経過について自伝的記憶をもとに記述、考察をすすめる。その中で⑩以降のエピソードは自我体験にとどまらず、他者の自我の働きについて驚きをもって発見した体験、他者からは容易に推測してもらえない自己の内面についての発見、筆者からは容易に推測できない他者の内面への気づきについて、考察の対象にするために取り上げた。

3. 事例報告

1) 学生のレポート①③④⑤及び相談者からの聞き取り②の事例

学生への設問は「あなたが、『自分は自分であり、この世でただ一人の人間である、自分の人生を生きていくのは自分しかいないのだ』と感じた最も若い時代の場面をエピソードとして表現してほしい」という内容である。原体験としての自我自覚体験の記述を求めた。以下は学生及び相談者5人のエピソードである。

① 学生Aの幼稚園時代の事例 当時4～5歳

仲良しの遊び仲間とその頃流行していたセーラームーンごっこをして遊んでいた時、かな

り夢中になって遊んでいて突然「私は本当はセーラームーンではない、私は私だ」と気が付いた。その後は同じ仲間と同じように遊んでいても「現実とごっこ遊びの世界を切り替えて演じている」と考える自分が出てきたように思う。

② 相談者Bの小学生時代の事例 当時7～8歳

私は母からよく兄と比較されることがあった。たいてい兄のほうが褒められて私に対して小言を言う時に母は兄と私を比較した。ある時私は突然思った。「兄と私は違う人間だ。兄と私が違っているのはあたりまえのことなのだから、私は私でいい」。そのあとからは母へのこの相談者自身のいら立ちは減少したのではないかと本人は述べている。

③ 学生Cの小学生時代の事例 当時8～9歳

とても仲の良かった友達が突然の交通事故により亡くなってしまった。ひとり取り残されてしまった、と感じた私は悲しみのあまり「どうして私だけ生き残ってしまっているのか、一緒に死んでしまったほうがよかった」と思ってしまった。しばらくしてお線香をあげるために亡くなった友達の家を訪ねたときにそのことを亡くなった友達の母親に話したところ、「娘は亡くなってしまったけれど、あなたは今ちゃんと生きている。あなたの人生はあなたにしか生きられない唯一回だけの人生だから、大切にしっかり生きていってね。娘の分も生きてください」と励ましていただけてしまった。その時私は理解した。「亡くなった友達がもはや自分の人生を生きることができないように、私が亡くなってしまった友達の人生を生きることもできない。そして私の人生は他の人には生きることができない、そして私だけが生きていけるただ一つの人生だ」と理解できた。

④ 学生Dの小学生時代の事例 当時10～11歳

スポーツチームに所属してバスケットボールに勤しむ少女時代だった。あるとき汗が体中から噴きだすのを拭こうとして「この汗は他の人の体からは出てこない。私のこの体からしか出てこない汗だ。私の体も私もこの世でただ一人の人だ」と初めて理解したように思う。

⑤ 学生Eの中学生時代の事例 13～14歳

中学のクラブ活動でバレーボール部の主将をしていた。重要な試合をひかえ「チームとして戦うために私の代わりになるメンバーはいない。どんなことがあっても私が試合に出なければ現実のチームの戦いはどうにもならない。私は代りのきかない唯一人の存在だ」と強く感じた。

2) 筆者の自伝的記憶からのエピソード

① 原体験としての自我自覚体験 3歳半

1956年9月に3歳になり、その次の年の春、筆者は3歳半であった。庭は山吹の黄色とつつじの濃いピンクであふれていた。筆者はうっとりつつじの濃いピンクに見とれていたと思う。その時、つつじの花と筆者を切り離してしまうような、ある意味で啓示ともいえるような思いが突然筆者に訪れた。「私はつつじの花ではなかった。つつじとは違う私だった。自分で考えて自分で行動しなければ私には何も起こらない。自分で決めて自分で足を動かして母のもとに戻らなければ、いつもの生活にもどれない。私はこの世の中でたった一人しか

いない。気が付かなければよかった。自分はつつじだと思っていたかった」という思いが自分に責任をもつのは自分しかいないという寂寥感と責任の重苦しさと共に私を占領した。この件について20歳の演習でレポートを書くまで、寂寥感に満ちたこの体験を他者に話そうと思ったことは一度もない。しかしその時感じた寂寥感だけは忘れられないほどの強烈さで筆者のなかに残った。そして、ドルフ・コーンスタムが紹介している自我自覚体験者たち^(注2)と同じように、他者に話しても分かってもらえるはずがない、話すだけ無駄だと筆者も思ってきた。そればかりか、もし口に出して表明してしまったときに、周囲からきちがい扱いされてしまうかもしれないし、最悪の場合は精神病院に一生閉じ込められて出てこれなくなってしまうかもしれないということも考えた。そのような生涯を送った精神病の人の例を両親がよく話題にしていたためである。

この体験の直前に母となにかトラブルがあったという記憶は筆者には全くない。そしてこの場面が3歳半だと筆者が特定できるのは、筆者の養育に関わる特殊な事情が関係している。筆者が3歳までは病弱だった実母に代わって筆者を主に養育したのは父の実家である大家族の商家の人々であり、その中でも主な養育者は父の姉に当たる女性、つまり伯母であった。彼女は離婚後実家に戻っていた人であったが祖母とともに筆者を育ててくれた。3歳まではほぼ1週間交代に父母の家と父の実家とを往復して育った。祖母が病気がちになったこと、母が回復してきたこと、4歳から幼稚園に通う準備期間にはいることなどがあって、3歳からは父母の家ですべて生活するようになった。この時、伯母には感じたことのなかった感情なのであるが、母に対して明確に「自分とは違う考えの人だ」ということを意識した覚えがある。おそらく周囲から「母は病み上がりだから負担をかけないように、お利口でいなければいけない」など言い含められたのではないだろうか。4歳の春からは幼稚園に通っているので、庭のつつじ(5~6月)の中にいる私は4歳ではないと判断できる。

② 自我自覚と幼児の行動選択 4~5歳

小学校に上がる前のころの経験なのだが、夜、母に叱責されたことに納得できず、「これ以上この母とは一緒にいたくない」と思った筆者は一人で家を出た。100mほど田んぼのあぜ道を歩き小高い土手から車のライトが通り過ぎていくのを見ていた。その時、前回同様に啓示めいた思いが訪れた。「私が自分で行動しなければ、母のもとに帰れるということはない。私の決断だけが私の行動を決める。さあ私はどう行動するのか？」という問いだった。「母を心配させることを私は望まない。自分で歩いて家にもどる」と幼児の筆者はそう決めて行動した。母は車のライトの手前で筆者の影をみたらしく「車に飛び込んで娘に自殺されたらどうしよう」と生きた心地がしなかったと後から聞いた。この小さな家出はとても親不孝なことだったと筆者は幼い心に刻んだ。

③ 他者の自我の存在を意識した体験 4~5歳

① 父の独り言

囲碁を趣味にする父は自分用の厚い板でできた碁盤を手に入れ心が躍っていたと思う。父

の留守中にその碁盤の目に魅せられた4歳の筆者は鉛筆で碁盤の上に女の子の絵をかいて盤上に鉛筆の堀痕をつけてしまった。帰宅した父は絶句し、筆者は事の重大さに気が付き父の激怒を覚悟した。そのとき父が言った言葉は「この女の子の絵は家族のことを忘れて碁を打つことに夢中にならないように、という自分に対する戒めだと思ふことにして、お前を叱らないことにする」というものだった。そのとき筆者は「大人というものは幼い自分には考えもつかないようなことを考える存在だ」と感じ、大人の言うことを正しく理解して決して軽んじてはならないと思った。

② 父と母の会話

5歳になり、保育園に通いだした筆者は通園途中の友達と共有できる会話を探することに苦慮していた。前の晩の父母の会話からヒントを得て筆者はその通園友達の家が生活保護を受け始めたということを話題にして彼女に話しかけてしまった。当然のことながらその晩筆者宅はその家族からのクレームを頂いた。とんでもないことをしてしまった筆者に、両親はどれだけ激怒することか、と再び覚悟したのだったが、父は母にこう言った。「この子にはまだ想像出来ないことがたくさんあるのだから、このことで叱ることはやめよう。大人が気を付けて子どもの前でこのような会話をしなければよいということなのだから、自分たち大人への戒めと理解しよう。今回のことは全て大人の責任だよ」というものだった。父は幼い筆者が考え付かないような判断をする、とその時も感じた。父が自分とは異なる内面を持つ明確な他者であるという理解には違いないのだが、父と自分との隔たりとは感じていないところが母に対する思いとは異なる。父は無条件で筆者を包む、という感覚に近いものだった。

④ 説明できないための責任の重さを自覚した体験 7歳

小学2年生の一学期の体験である。当時結核への感染を予防するために、小学生はツベルクリン検査という注射をし、反応が陰性で免疫がないと判断されるとB.C.Gという注射をうけることになっていた。筆者は生後すぐに母から感染した小児結核に罹患していたので、これまで幼稚園でも保育園でも小学1年生のときにもツベルクリン検査では当然陽性反応が出ており、B.C.Gの注射は受けたことがなかった。2年生だったその朝も母は「赤くはれ上がってこないで陰性に見えるけれど結核の経験があるのだから、B.C.Gは受けなくていいからね」と言って私を送り出した。ところが、保健室での検査の列に並んだ私の番がきて、「注射はしなくてよいと言われてきました」と話したにも関わらず、保健室の先生と白衣の医師は私の腕をつかんで瞬く間にB.C.Gの接種をしてしまった。「違います」と言おうとしたが、涙があふれて声にならなかった。幼い筆者はその時、死を覚悟した。伝わるように説明して自分の命を守れなかったのだから、結核菌を注射されてしまって、今から訪れるだろう死は全て私に責任がある。そう覚悟して教室に戻ったのだったが、結局死に至ることはなく現在に至っている。自分が説明できなければ決して他者が代わって説明するということはあり得ないのだということが身に染みた経験だった。

⑤ 表象作用としての神と自己の関係について考えた体験 8～9歳

小学3年生か4年生の体験である。筆者の父母はクリスチャンだったので、物心ついた時には幼児洗礼が済んでいた。筆者家族の所属する教団では、洗礼の次の段階の儀式として堅

信札というものがあり、一人前のクリスチャンとして信仰を固める意味があったと思われる。その準備として若い宣教師が指導にあたり、告解（いわゆる懺悔）についての指導がなされ、「人間という存在は生まれながらに原罪という罪を背負っていて、謙虚な心を持っていないと自分の罪について悔い改めることはできない」という内容の指導を受けた。毎週日曜日のミサの度に密室の告解部屋で司祭に懺悔するのだが、筆者は数回目でもはや懺悔の種が尽きてしまい、なにも見つからなくなってしまった。準備に困った幼い筆者の中で「懺悔の種が見つけれない私は大変に傲慢な人間なのだろうか？ いや、もしかすると懺悔するためには何か悪いことをする必要があるということだろうか？ 他のみんなはそうやって懺悔の種をつくっているのか？」という考えが頭をかすめた。それと同時に自分の想念の危うさに恐怖も感じた。教会の教義や儀式につきあって合わせていくよりも、自分の人生を後悔しないように、自分に責任を持って生きていく方がずっと大事なことだと小学生なりの判断をし、それ以後筆者は教会組織と距離を置くようになっていった。相変わらず今でも自分はクリスチャンであるということを疑っていないが、もはや、幼児期に考えたように、自分の外の世界に神という存在があるとは考えていない。自分の内面のもっとも真実探究を求めるところあたり、フロイトの言葉を借りるなら超自我のあたりが心の中で神の役割をして筆者と対話してくれる部分であり、その部分に恥じないようによく考えながら自分の人生を全うすることがクリスチャンとして生きることだと信じて疑わない。個人内の最も良識のある表象部分を神として自分のなかに存在させ、この存在を頼りに最大限尊重しながら、見守りの役回りもして貰うという筆者の信仰の持ち方について、青年期に言葉で表現を試みたことがあるのだが、当時クリスチャン仲間の青年たちからは、信仰に躓いた人として憐れみの対象になるだけだった。これ以降、信仰の問題について口に出して他者に話してみようとする事自体が間違っていると思いつけて生きてきた。ただ30年以上前に亡くなった、筆者に洗礼を授けさせてくれた父とはこの件について話し合ってみたかったし、父の信仰についての考え方を聞いてみたかったと思うがおそらく相容れない確立の方が高かっただろう。

⑥ 思春期の自我体験

5年生の春の遠足の自由行動で、草原にあおむけになって晴れた空に雲が流れていくさまをじっと見ている、再び幼児期のあの感覚が蘇った。「やはり、私は流れる雲ではなく、私だった。私って何なのだろう。ともかく自分に責任を持つのはこの私しかない」荒海に小舟をひとりで漕いでいくような心細さを感じた。これ以後は社会的自己意識に筆者の関心は傾き、集団のなかの一員として仲間たちに信頼されるような自分になることにエネルギーを注ぐようになり、青年期の自我体験はしばらくの間、起こってこなかったように思う。

⑦ 青年期の自我体験演習の試み

大学学部時代の講義で人間関係学の演習^(注3)の時間に自己と自我の関係について自分自身の理解を確かめる演習があり、「自分を見つめる自分、その自分をまた見つめる自分、さらにその自分を見つめる自分、とどこまで外から見る自分を成立させていけるか」と課題を出された。筆者は自分を見つめる自分を見つめる自分まではついていけたが、それ以上は無理だと思いあきらめてしまった。自分を見つめる自分までは興味をもって考えたいと思ったが、

それ以上の試みにエネルギーを使うことは自分の能力の限界を超えているように見え、それが自分にとってどのような意味をもつのか、考えることができなかった。青年期の筆者の興味と感心は専ら生身の学生仲間たちとの交流と相互理解に向けられていた。

㊦ 成人期の自我体験

26歳で結婚した筆者は家事と仕事に勤しむ日々を過ごしていた。風呂掃除を終えて、浴槽に流れ込む流水をみていて、またしても幼児期と同様にあの感覚が訪れた。「私は流水と一体ではなかった。やはり私はこの私でしかない。この世で唯一人の私だと思ふ時のころもとなさは幼児期と同様で相変わらずだけれども、この寂寥感は連れ合いの責任でもなければ、親たち養育者の責任でもない。もしかすると自我の存在に気が付いて不安や寂寥感を感じるということを、キリスト教の言葉では原罪と位置づけている^(注4)のではないかな？ 自然物や他者と一体だと信じて何の疑いも持たずに安心感に浸っている状態を「エデンの園」つまり楽園、天国とするなら、つつじや流れゆく雲や流水にうっとり一体化していられた私は「エデンの園」にいた私で、自我の存在に気が付いたとたんに現実世界にもどり、荒海で一人小舟を漕ぎながら、意図的に対話しなければ神と一体ではない自分に気が付いた時に「原罪を背負っている」とキリスト教では表現している様な気がした。その時点で筆者はこの先も、自分が原罪を背負っているという発想をすることはやめて、出会う人や物事と向き合い気持ちを繋げながら精一杯生きていこうと思った。

4. 考察

従来の近代科学を進める研究者の立ち位置は「観察主体と対象を完全に切り離れたところに成立する普遍的真実がある」ことが前提とされてきた。心理学分野の科学論文においても「わたし」を主語にすることがタブー視されてきた歴史は長い。行動心理学の強い影響のもとに感情についての研究も心拍数や瞳孔の大きさによって実証されるべきものであった。しかし近年、心理学分野では、主観的意識や記憶そのものを意味ある研究対象とする挑戦が続いており、人間科学から主観性を削り取ろうとしてきた近年までの学問の状況を乗り越えようとする研究者が出てきている。自我体験についての先行研究者であるドルフ・コーンスタム、渡辺、高村、天谷等はまさにその流れを構築する研究者達であり、本稿もまた、その流れに与するものである。そしてすでに、本稿の特に縦断研究部分について主語が筆者であることを先にお断りしてあるが、自我体験が当人の報告によってしか窺い知ることはできない種類のものであり、自我体験の現象が他のどのような現象と絡み合っているかを考察するためにはたとえ筆者の自伝的記憶であっても縦断的研究の俎上にのせて検討することは意味があると考え、考察の対象にした。

(1) 横断的事例についての考察

5つの事例のうち、1例が幼児期(事例A)、3例が小学生(事例B、C、D)、1例が中学生(事例E)である。学生への設問は、自我自覚体験というよりも、自己の斉一性を理解

した最も初期の原風景の心理的場面の記述を求めた。より多くの学生が自分の問題としてレポートが書けることを重視したためである。前述と重複してしまうが、はっきりとした記憶を引き出して表現できた学生がおよそ6割、全く思い当たるものが出てこないとする学生がおよそ2割、自我の斉一性とは異なる内容での表現になってしまった学生がおよそ2割という結果であった。この事実は半数以上の学生が自分の問題として自我体験を理解できるということを示していると考えられる。

○幼児期の自我自覚体験

セーラームーンごっこの最中に啓示を得た事例①はごっこ遊びにおいて、みたて行為の最中に自分自身は「見立てている存在」であり、セーラームーンは「見立てられている役割」だと明確に意識されている。これは、泥で作った団子を食べる真似はするが、本当に食べてしまう幼児が稀であるという事実と重なって見える。心的表象の成立と象徴機能が良く働いているために生じた、認知力の際立った自我自覚体験と読み取ることができる。しかし、ここで最も注目すべきなのは、セーラームーンと一体化して充足感を感じて遊んでいた次の瞬間に、セーラームーンとは異なる独立した自我を発見してしまったことだ。つつじの花と一体化していた陶酔から突然花とは分離した自我を感じてしまった縦断研究事例の3歳半の筆者の自我経験と重なって見える。2歳過ぎからみたて遊びを始めるとされる幼児は現実生活のなかでの実際の自分と虚構の世界でふりをして楽しむ自分を別物とわきまえて楽しんでいる、と考えられるが、実際は事例の学生の幼児期と同様にいつのまにか役割と一体化し、そして再び現実にたちもどることを繰り返して二つの世界での振る舞い方について整理できるようになっていくのではないだろうか。そしてそれは子どもに限ったことではなく、音楽を楽しむ大人、絵画鑑賞を楽しむ大人も全く同様の精神作業をしていると言えそうだ。この場合、虚構の世界と現実世界を行き来して楽しむ大人はそのことに熟練してしまっているので、幼い者の自我体験のようにショッキングな孤独感や寂寥感は伴わずに済むように見える。特に現実世界と虚構の世界の自己に統一感があり亀裂を感じずに済む場合には自我自覚体験には結びつかないで済むことは十分に考えられることである。事例①のセーラームーンに成りきっていた幼児期の自我自覚体験はマイナスの感情や衝撃を伴っていない点において、相異なる自我の亀裂をもたない充足した幼児期を過ごしていた子どもの認知的覚醒とみることができる。

○学童期の自我自覚体験

事例②③④が小学生の時代の記憶である。天谷が言うように、青年期のアイデンティティの確立の前の時点での自我体験の時期として中学生の調査を重視すべきだという提案の裏付けともなる事例報告だと言える。思春期に突入する小学生後半期は、実際には記憶から取り出せない自我体験や言語表現される機会のなかった自我体験が多数存在することを予想させる。②の事例で兄と比較されて苦しんだ小学生と③の事例で親友の事故死から立ち直った小学生の事例は明らかに異なる二つの自我の亀裂を感じさせる。その苦しみを伴った自我自覚体験に比べて、④の汗の事例では二つの自我の亀裂を感じさせる要素は見つからず、満たされて生活する前思春期の認知的覚醒を代表するような自我自覚体験だと言える。自我体験に

ついて意識化されるかどうかの違いは、個々人の認知的能力や社会性による諸条件に加え、二つの自己を意識する経験、他者の助けを借りながら、若しくは独力で自己を対象化する作業が為される機会があったかどうかにかかってくるのが推測される。特に自我体験については個人の体験そのものを他者と共有することが容易でないため、対象化する力の育ちは他のいろいろな経験によるところが大きいと考えられる。そのために、前思春期の時期の芸術鑑賞や読書の後の感想文の作成や感想の交換などの機会は自己を対象化するよい機会であると位置づける視点も重要だと考えるべきである。

○中学時代の自我自覚体験

⑤の事例は集団のなかでの自分の存在の位置づけが存在感を伴って感じられる点が前の4例とは明らかに異なっている。自分から見える自分自身の視点に留まっておらず、他者から見た自分、集団全体から見た自分の存在の意味に踏み込んでおり、対自的同一性に加えて対他的同一性の視点が芽生えつつあるように見える。アイデンティティの確立が近くなると自我体験にも安定感が感じられる前青年期的様相である。

(2) 縦断的事例についての考察

渡辺恒夫は「認知発達と自我形成の二つの過程が、ある人々においてある仕方で交差するとき、そこに深い自己認識が成立し、準・普遍的ともいうべき〈体験〉が生じる」⁹⁾とし、高石恭子は「自我体験を主体的体験として意識化したり、また想起しやすい人に共通の個人的要因が存在し、最早期の基本的信頼感の獲得体験と密接に関連しているのではないか」¹⁰⁾という仮説を立てている。また「生まれて間もなくの時期に、母性の養育に恵まれ、世界に受け入れられた体験を十分にもたなかった子どもは、生涯発達上の節目、節目で〈わたし〉と世界との亀裂や、二つの自己間の違和に不安を喚起され、混乱を生じるのではないか、という。この渡辺と高石の提案をうけて、本稿の縦断的事例の検討をしていきたい。

○縦断的研究事例①と②の検討

筆者の記憶では実母と交互に筆者を養育した伯母はいつも無条件で幼い筆者の味方であり擁護者であった。危険なことをして一度本気で叱られたことがあるのだが、伯母の愛情を疑ったことは一度もないと記憶している。長じてからも、親戚の面々は筆者について、この伯母に手をかけてもらったので順調に育ったと言うのだが、筆者にとっても産みの母は伯母のほうではなかろうかと密かに思っていた少女期に特有な一時期があった。筆者の直感では筆者の第一のアタッチメントの対象は伯母であり、次が父であったように思う。知人等から「父親と母親とどちらが好きか」と聞かれると筆者は必ず「お父さん」だと返答していたそうで、後日母が恨めしがって言っていたことが論拠である。筆者が3歳の時から養育は完全に父母のもとでなされるようになったので、自分の生きる場所は自分の家しかないと自覚していた記憶はある。父に比べて母を好きでなかった訳ではなく、母と二人だけで過ごす時間よりも父が帰宅して三人で一緒に過ごす時間のほうが好きだったというだけのことなのであるが、そのようなことを言葉で表言できるとも思わず、また母には分かってもらえそうにないことだとして3歳の筆者は弁明することを諦めていたように記憶している。しかし、母はそれで

も筆者のアタッチメントの対象であり、母の存在を安全基地として敷地内の草花を探索していたと考えるのが妥当だと思う。初期のアタッチメントの対象であった伯母への基本的信頼感はおそらく揺るぎないものであったし、実母への信頼感もたいして問題はなかったと思う。問題があったとすれば、伯母の養育と実母の養育について感覚的にはあるが3歳の筆者は比較できる位置にあった。そして違いも感じていた。母親的伯母と教師的実母という程度の違いである。また伯母や実母に比べると父は風来坊的な自由人で、筆者が目を離すとどこにいるか分からなくなってしまうことがあり、頼りにならないと感じることもあった。二つの家の送り迎えは常に父の役目であったので、幼い筆者が迷子にならないためには、父の動向には敏感にならざるを得なかった。父の存在も入れるとすれば筆者は3歳にして3人のアタッチメント対象への比較ができる立場にいたことになる。外界と自己との亀裂とまでは言わないまでも、3人の違いは分かっていた。強いて言えば伯母に対しては安定型のアタッチメントを、実母に対しては回避型のアタッチメントを、父に対してはアンビバレント型のアタッチメントを向けていたと言える。この3人に対する信頼感の違いを見分けられる立場にいたということが3歳の筆者の環境的側面と認知的側面の特殊性であると言えそうだ。

さて、M.S. マーラーは乳幼児の心理的誕生の過程を、正常な自閉期を経て共生期、分離期、個体化過程という経過を経ると提唱した。マーラーは共生段階の説明として、生後3週間から6か月時の姿を想定して「我Iは我でないものNot Iからまだ分化されていない。母親との未分化な融合した状態にあると考えられる。やや内と外が異なったものとして感じられるようになっている程度であり、共生の本質的特徴は母親表象との幻覚的な、若しくは妄想的全能感に満ちた精神的融合にある」¹¹⁾ とする。また共生の頂点から孵化の期間を経て、移動能力の獲得により、探索行動が盛んになるのであるが、さらになぐさめや安心感を得るために上手に母親を利用できるようになる¹²⁾ と説明している。学生Aのセーラームーンからの独立分離と筆者のつつじの花からの独立分離の自我体験はまさに我Iと我Iでないセーラームーンやつつじが俯瞰的にみえてしまった形の自我の発見と言える。その意味では渡辺の言うように自我自覚体験は認知発達と自我形成の二つの過程が、両者において其々の仕方で交差し、そこに深い自己認識が成立した体験であると言える。また高石は前述したことであるが「自我体験を主体的体験として意識化したり、また想起しやすい人に共通の個人的要因が存在し、最早期の基本的信頼感の獲得体験と密接に関連しているのではないか」¹³⁾ という仮説を立てている。この仮説に沿って筆者の体験を考えると、3人のアタッチメント対象を比較できる位置にあった3歳半の筆者はこの3人を観察理解する環境に恵まれていたと言える。また前述したことであるが、渡辺は「生まれて間もなくの時期に、母性的養育に恵まれ、世界に受け入れられた体験を十分にもたなかった子どもは、生涯発達上の節目、節目で〈わたし〉と世界との亀裂や、二つの自己間の違和に不安を喚起され、混乱を生じるのではないか」¹⁴⁾ というのであるが、筆者はこれについて肯定はしないが真向から反論するつもりもない。確かに筆者の思春期は信仰の問題から始まり、いかに生きていくべきかを探るために考えあぐねてエネルギー喪失の危険を感じることもあった。しかし、それは自分の認知力と思考力、そしてそれを助ける人生経験や想像力の不足によるものであり、アタッ

チメントの不足とはどうしても考えられない。むしろマーラーの言うように、全能感に満ちた精神的融合から独立分離をするのが乳児期から幼児期にかけての発達の課題であるとするならば、独立分離の仕方は三者三様であることは想像に難くない。その中に自我自覚体験が含まれている可能性は大いにあり得ると考える。何の疑いも疑問ももたずに過ごした伯母の養育から実母との生活に移ったことが、つつじの花との一体感から突然独立分離した自我を見つけてしまった寂寥感と重なって理解される。①と⑩の筆者の事例をとおして見えてくることは、主要な養育者やアタッチメントの対象について筆者は疑問を持ったり、比較してみたりを日常的に行っているという特徴をもっていることだ。これは初期のアタッチメントが十分でなかったと結論付けるには当たらずむしろ早期のアタッチメント成立という条件の上に「比較」と「疑問」という認知的要因が作用したように見える。

近年アタッチメントを考えると母子単線としてのアタッチメントに限らず、ネットワークとして養育者や親密な対象への複数のアタッチメントを考える重要さが高橋恵子らにより提唱されている¹⁵⁾。専業主婦による子育てが減少し、まさに子育てが子どもをめぐるネットワークのなかで進められる現代の子ども達の自我意識や自己意識の育ちを考える時、筆者が経験した自我自覚体験はそれほど特殊な例ではなくなっていると考えられる。そして、今後、アタッチメントが信頼感のネットワークに支えられて複数のアタッチメント対象、複数の養育者をもつことが当たり前の時代になっていった場合に気を付けなければならないことは、子ども達が誕生直後から複数のアタッチメント対象をもつことにより、アタッチメントの安定性が不確実なものにならないように、アタッチメントの不安定さのために探索行動の抑制がおこらないようにするために、保護者支援の視点が貫かれる必要がある。また子ども達が複数のアタッチメント対象を持つことになったとき、筆者に起こったことと同様に複数のアタッチメント対象を比較して認知する場合が増えていくことが容易に考えられる。その時に幼児自身の内面が自律に傾くか、外界に対する心もとなさからくる不安に傾くかの岐路になることが推測される。その岐路を分ける物はおそらく自己肯定感や、外界に対する幼児自身の能動性ではないかと予想できるが、この点についてはさらなる研究が必要である。

○縦断的研究事例⑩以降の検討

次に⑩の①と②の事例において、他者の意図が自分の信念とは全く異なったものだったと感じた、4～5歳の筆者の発見について検討してみたい。これは父親の父性を伴った判断が筆者の予想を遥かに超えていたというだけのことに見えるが、数ある叱られた経験については何も記憶していないにも関わらず、⑩のエピソードの2場面だけは鮮明に記憶に残っているため、注目した。これまでの叱られて悲しい、悔しい思いが筆者の記憶に残っていないのは、その事実を自分自身と養育者等の人的環境との一体化したものとしてそのまま受け入れてきているためではないかと考える。コールバーグは幼児期までの道徳的判断基準は親に叱られるか許容されるかに依存した他律的な状態にとどまる¹⁶⁾と説明しており筆者の記憶の特徴の裏付けとなると考えられる。つまり、⑩のエピソードは、他者の意図、信念として発見の驚きをもって意識されたために記憶に刻まれた。確かに、3～5歳と言えばパーナー等の心の理論では、第一次誤信念課題の成立する¹⁷⁾時期であり、他者の自我の働きに

ついて自分とは異なった面があることを理解し始める年齢である。㉞の二つの事例は父の意図と筆者の予想のずれが顕著であり、他者の信念を発見した場面であると言える。他者の意図や自我の働きへの気づきがおこる3～5歳という年齢はほぼ同時に自己の意図や自我の働きを発見したり気付いたりする可能性のある年代であることを意味する。他者と自己の意図の違い、また他者と第三者の意図の違いに気が付いた幼児は自身の自我の存在やその働きを認知する条件は十分に整っていると言える。

現代日本の社会のように幼児期を集団生活で過ごすことが当たり前の環境になった現在では、保育所保育指針においても幼稚園教育要領の人間関係領域においても他者と出会って様々な感情を味わい、保育者の力を借りて他者理解に繋げていこうとしていることは極めて適切なことだと言える。現代の幼児たちは子ども理解に長けた教員や保育者たちの力を借りてさらに安定した自己意識をもてるようになることが期待される。

小学校高学年に差し掛かってからの自我自覚体験は比較的安定的に受け止められて個人の内面での位置づけがなされやすいことが見えてきた。しかしそこに至るまでの自我体験は事例㉞や事例㉟のように現実世界への適応を踏み誤るような危うい側面ももっていると言える。そのような意味では子ども理解の視点は幼児教育や保育の世界だけではなく思春期に至るまでは引き続き重要視されなければならないことだと言えよう。

(3) 総合考察

自我自覚体験は幼児期の自我の目覚めや母子分離後の時期から生起する可能性を持ち、その期間は最盛期である前青年期まで長期間の生起の可能性を持つといえる。自我自覚体験に伴う感情はポジティブなものから不安感の強いものまであり得るが、不安感に捉われすぎないように保育者や教師、養育者からの心理的援助や理解が為される必要があり、それが有効に働くならば、さらに安定的な自己理解や他者理解の力に繋がっていくことが期待される。

しかし、筆者の実感の中には、幼児、そして児童にとって理解され尽くすことが最善であるとも言いきれないという思いもある。大人の視線をはずれたところで自分の世界を育てて自分で気が付いたり自分で学んでいったりする側面を幼児も小学生も大人と同様にもっていることをも理解していきたいと思う。それは子どもにとってちょうど良い心理的距離を教員や保育者が作り出していくことが、大人と子どもの共生の一側面でもあると考えるからだ。勿論それは子どもの内面について大人が気が付かない迂闊さを肯定するものではない。大人は子ども理解のために常に研鑽を積む必要があり、その結果については子ども達の最善の利益のために活用すべきである。一方、子どもは大人からの理解や教育、支援を受け取ろうとするだけでなく、自分自身を自分で育てていこうとする能動性をもてるようになることが何よりも大切ではないだろうか。そのための観点として、幼稚園教育要領の前文に掲げられている「生きる力の基礎を培う」ことを目指すことは大変重要である。

そして、これまでの自我自覚体験についての研究が発達心理学の中で、他の分野と結びつきにくい独立した分野に見えるのは事実であるが、自我の自覚を他者の自我認知への視点や発見のシチュエーションにまで拡大していくと、他者理解と心の理論での研究の蓄積と重ね

合わせて研究を進めることができるのではないかと考えるに至っている。しかしながら、本研究の位置付けは発達心理学的研究を出発点とした、保育学や教師論における子ども理解を進めるための研究であると筆者は自覚している。

付記

エピソードを提供くださった過去の学生の皆さんと相談者にこの場を借りて感謝申し上げたい。またクリスチャンの筆者を快く奉職させていただき信仰心に関わる本稿を発表したいと思わせてくださった大乘淑徳学園に感謝している。

引用文献

- 1) 渡辺恒夫 1992「自我の発見とは何か：自我体験の調査と考察」東邦大学教養紀要24 p.25～50
- 2) 天谷祐子 2011「私はなぜ私なのか」p.73
- 3) 渡辺恒夫 1992「対自的自己意識の研究(1)」日本心理学会第56回大会発表論文集 164
- 4) 西村州衛男 1978「思春期の心理3 自我体験の考察」岩崎学術出版社 255-285
- 5) 田畑光子 1985「“お前はだれだ!” の答えを求めて」臨床心理学研究2 8-19
- 6) 高石恭子 1989「初期及び中期青年期の女子における自我体験の様相」京都大学学生懇話室紀要19 29-41
- 7) 天谷裕子 1997『『自分』というものへの気づき』名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学論集26 32-36
- 8) ドルフ・コーンスタム 2016「子どもの自我体験」金子書房
- 9) 渡辺恒夫 2004「〈私〉という謎」新曜社 p.152
- 10) 高石恭子 2004「〈私〉という謎」新曜社 p.189
- 11) M.S. マーラー 1981「乳幼児の心理的誕生」黎明書房 p.54
- 12) M.S. マーラー 前掲書¹¹⁾ p.128
- 13) 渡辺恒夫、高石恭子 2004「〈私〉という謎」新曜社 p.131-142
- 14) 渡辺恒夫、高石恭子 前掲書¹³⁾ p.43-72
- 15) 高橋恵子 2010 人間関係の心理学：愛情のネットワークの生涯発達 東京大学出版会 p.62-67
- 16) 村田孝次 1992 発達心理学史 培風館 p.410～412 コールバーグ 1987 道徳性の形成 新曜社
- 17) 子安増生 2016 心の理論から学ぶ発達の基礎 ミネルヴァ書房 p.18～22

注1 保育学演習の担当教官は津守真先生であった。

注2 ドルフ・コーンスタム 2016「子どもの自我体験」

注3 人間関係学演習の担当教官は松村康平先生であった。

注4 梶田徹一「意識としての自己」金子書房

2016年夏、カトリック教徒であることと、心理学研究者であることを両立してこられた梶田先生のこの御著書のなかに、自我自覚意識と天国からの追放の意味について拙稿での理解と同様の記述があることを発見した。